

1946年7月28日  
**幼児の教育**  
**110年の散策**  
 56頁 109-110

## 戦後の復興関連の記事から

— 第四十五卷第三号（一九四六年十二月）より —

本シリーズでは、戦前の関東大震災や、約二十年前に発生した阪神淡路大震災など地震関連の記事が続いた。今、東日本大震災からの復興策と、これから本格化するであろう保育制度の改革を重ねて概観してみると、復興の中心にあるはずの被災者や、保育の中心にあるはずの子どもといった、まさに当事者側の視点がどこまで生かされている政策なのか、不明瞭なままである。さて今回のアーカイブズは、大戦終結期に約二年間の休刊を経て復刊した本誌の第四十五卷第三号の記事から、戦後復興期の保育所の意気込みを見ていきたいと思う。

当時の編集主幹であった倉橋惣三による「復刊のことは（第四十五卷第一号）」には、「過去には追憶と舊足跡きゅうそくがある。今日には反省と新意気があり、将来には希望と新発展がある。（中略）わけでも、過去を知らず、今日に新たに生き、将来に新たに展のび開く幼児達と共にあるものとして、本誌の復刊が、真に新らしき再生でなければならぬことこそは、自ら警まもめて怠りなきを期している。」とある。この保育界の復興が、将来に新たにのび開けていく子どもたちと共にあらんとする保育士の決意の中で進行したことを、今ここで、しっかりとかみしめておきたい。

佐治由美子（聖学院大学）

再建の保育界 東京都保育所の復興（一九四六（昭和二十一）年第四十五卷第三号）

秋田美子（東京都民生局保護課）

私達東京都の保育班は、殆ど総ての人から全く不可能だと評価されて居た幼児の集団疎開を  
決行して、長野、埼玉、群馬の各県に直営五ヶ所、委託二ヶ所の疎開保育班を設置し、帝都に  
残された幼児二百数十名を送った。可成りの悪條件の下で、関係者一同全く決死の覚悟でこれ  
に当ったが、見知らぬ土地に女ばかりのこととてその労苦は言語に絶するものがあつた。しか  
し良く全員之を克服して無事難事業を終了した。可愛い子供達を待ちに待った保護者の膝下  
に返したのは昨年暮近くだつた。

此の頃廢墟と化した街の中には、遊ぶ術さえ忘れて了つて無暗にジープの後を追ひ、進駐軍  
に媚びる様な態度の子供の姿が非常に多くなつて来た。この悲しい状態はどんなにか私達の胸  
を痛めたことであろう。一日も早く保育園を再開して、この子供達に健全な遊びを与えてやり  
たいと云う希いは期せずして起つて来たが、時期まだ早しとの上層部の意見もあつて、兎に角都  
内の子供の動態を調査し、施設に対する要望の一端を知る為にもと計画されたのが、焼跡の野  
外保育班の編成であつた。神田、杉並を皮切りに、疎開保育の疲れを癒す間もなく、京橋、王  
子、芝、牛込の各区に十一ヶ所の青空保育を試みた。社寺の境内、公園或は又焼跡の真只中に而  
も時期は寒さに向う十月末から十二月の上旬にかけてであつて非常に不適當な折であつたにも  
拘らず、飢えかわく者が水を求める如くに集つて来た。多い處では日々の出席二〇〇名を下ら  
ず、延八〇〇〇名の子供が之に参加すると云う盛況だつた。此の状態は又保姆達をいたく感激  
させ、寒風に身を曝し殆んど何等の保育用具もない中で、敢然自身の持つ能力、技術のみを唯

一の武器として頑張りつづけさせたのであった。「先生働いている私達の為に是非之を続けて下さい」「こんなに喜んでいる子供の為に何とかしてこの事業を止めないで下さい」と母親達は切実な願いを訴えるのだった。又幼い子供の口からさえ「早く御屋根のある保育所に行きたいなあ」と洩らされるのを聞いては、私達もヂツとしては居られなかった。

此の頃漸く機も熟しかけて居たので、この野外保育の結果を好資料として、色々の準備を経た後、都立保育園として最初の産声を挙げたのは今年三月十二日である。現在の勝間保育園がそれで、開園数日にして百五十名を入園させねばならぬ有様。所属の園長以下暫くは夜の目も眠らず、準備に忙殺され乍ら子供達の期待に答えたのである。

○

無我夢中に働らいた野外保育終了後、新たに常設のものを作る準備の期間中、漸く息をぬいた途端、自分達の持つ保育理念や保育方法の検討の必要を感じ出した。頭の切り替えをし、新しい観点に立ち直らねば、安心して子供の前に立つことは出来ない、焦り気味になって来ていた。そこで都では早速之に応じて可成り大掛りな再教育講習を催し、倉橋先生以下十数名の講師を迎えて約一ヶ月に亘る期間を之に費した。民主主義とは何か、国際的な立場から今は如何に保育すべきか等、その他広範囲にわたる勉強を受けて大いに得る處があった。

勝間をスタートに、次々に都内区部に十三ヶ所、三多摩に十二ヶ所（之は戦時中から継続されたもの）の保育園を設置し、新たな角度から保育なるものを建設して行こう、即ち在来のものを色々批判し、幼稚園と託児所の長所のみを採り上げ、その上に新しい文化国家の建設と世界平和に貢献すべき使命を擔う幼児に人間としての基礎をしっかりと築かねばならないのだと、大いに意気込んだのだ。併し現実の姿として、私達は自分の力の足らなさ、技術の未熟さ

を一々思いちいちい知らされたのである。殊に年齢層の若い保母達は、戦時中に総ての教育を受けた悲しさに、談話にしても歌にしても使えないものが多く、さりどてどうして好いか解らぬと云う場合も少くなかった。その当時は未だ国民学校以上の教育指針や方向も確定されず、何處どこに根拠を置いてよいのやら、折角の講習は受けたが一つひとつ、実際の場面に突き当たるとまだ解らぬことが多くて困った。そこで私達は在来の人から与えられるのを待つのみを態度を捨て、自分達の手で自主的に勉強し研究し創ひらっていく会を作ろうではないかと云う事になり、係の方も色々助力された結果、東京都保育研究会なるものを組織したのは今年の五月半ばであった。

会員百二三十名余りしかないが、数種の研究部会を編成し、部会の活動を中心に日常の保育を研究会の総合的な結合に依って動かして行こうとする仕組みで、日々の保育の問題は即部会の研究課題になるわけで、研究と平常保育とが不即不離の關係に成り立って居る。(中略)

體からだにも心にも殆んど一寸のすきもない様な気持ちで、實際皆可なり疲労しているに違いないが、建設の喜びと仕事に対する誇りとがそれをカバーして、明日への努力をさせてくれるのだ。併しこの研究会もまだ総ては将来にかかるのであって、その研究活動の結果が云々うんぬんされるのは今後のことであるが、どうか会員一人々々の責任ある勉強によって、今後の保育事業の上に何等かの足跡を残す様なものになってくれることを切に願う次第である。

こうして、係員も保育園職員も全く心一つにして働らいて来た結果はその事業の上に反映して、開設六ヶ月にして在籍園児数二三〇〇名を数えるに至り、彼方でも此方でも受付は断り切れぬ程となった。入園を許された母親の感謝の気持ちは色々の形をとって園への協力となって表われて来ている。それにも増して嬉しいことは、子供達が日曜や祭日をつまらないと云い毎日々々の登園を心から楽しみ喜んでくれることである。(後略)